

## 2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部コミュニケーション・デザイン学科	准教授	日栄 一真
最終学歴	学位	専門分野
情報科学芸術大学院大学	修士 (メディア表現)	ヒューマンインタフェース およびインタラクション、知 覚情報処理

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

人・社会・地域・空間との関係性の中で、課題を発見し、様々なメディアを用いて他者に伝わる形へと構築し、実践を通して価値を生み出す力を育成することを理念とする。

##### 【目標】

学生が以下の力を身につけることを目標とする。

#### 1. 課題発見力

社会や地域、日常の中にある課題や可能性を観察し、自ら問いを立てる力を養う。

#### 2. 企画・構想力

アイデアを単なる発想で終わらせず、目的・対象・手法・効果を整理しながら、具体的な企画として構築する力を養う。

#### 3. 表現・発信力

映像、音、空間、デザイン、プレゼンテーションなどを通して、自らの考えを他者にわかりやすく伝える力を養う。

##### 【方針】

教育活動においては、以下の方針に基づいて授業運営を行う。

#### 1. 理論と実践の往還を重視する。

知識を学ぶだけでなく、制作・企画・発表・運営などの実践を通して理解を深める。

#### 2. 学生主体の学びを促進する。

教員が一方向的に教えるのではなく、学生自身が自発的に考え、試し、振り返るプロセスを重視する。

#### 3. 横断的な視点を育成する。

デザイン、メディア、音響、空間、地域活動、情報技術などを分断せず、複数の視点を結びつけて考える力を育てる。

##### 【計画（方法）】

上記の理念・目標・方針を実現するため、以下の方法により教育活動を展開する。

### 1. 講義と演習を組み合わせた授業設計

基礎知識や事例理解を講義で学び、それを演習・制作・発表へ接続することで、知識と実践を往復しながら学べる授業を構成する。

### 2. 企画立案・制作・発表を含む課題の実施

学生が自らテーマを設定し、企画書作成、制作、プレゼンテーションまでを行う課題を通じて、構想力と発信力を育成する。

### 3. 地域・社会・実空間を意識した実践型学習

イベント、展示、地域連携、空間演出、メディア活用等をテーマとした課題を取り入れ、学びを実社会へ接続する。

### 4. 多様な表現手法への対応

映像、音、デザイン、プレゼンテーション、デジタルツール等を活用し、学生の興味や特性に応じた多様なアウトプットを支援する。

### 5. 学習成果の可視化

発表、展示、レポート、ポートフォリオ等を通じて学習成果を可視化し、学生自身が成長を実感できる機会を設ける。

## ○担当科目（前期・後期）

### （前期）

<本学>

地域ビジネス特講Ⅳ、専門演習Ⅰ、事業構想プロジェクトⅠ、総合演習Ⅰ、基礎演習

<他大学非常勤>

音楽芸術論（名古屋大学）

### （後期）

<本学>

地域ビジネス特講Ⅴ、地域ビジネス特講Ⅵ、専門演習Ⅱ、事業構想プロジェクトⅡ、総合演習Ⅱ、基礎演習Ⅱ

<他大学非常勤>

メディア工学特別講義 A（中京大学）

音響メディアⅢ（中京大学）

## ○教育方法の実践

### 1. 協働的な課題解決型学習の実践

本授業では、学生がグループで対話しながら課題を整理し、模造紙や付箋を用いて互いの発想を可視化しつつ、企画・プロダクト案を検討する協働的な課題解決型学習を実施した。

授業では、デザイン思考の考え方を取り入れ、単に多くのアイデアを出すことを目的とするのではなく、他者との対話を通じて視点を広げ、それらを整理・統合しながら、相手に伝わる提案としてまとめていくプロセスを重視した。

この実践を通じて、学生が課題を発見し、多様な意見を踏まえて発想を深め、構想を具体化しながら他者と協働して表現する力を養うことを目指した。

## 2. 伝統産業との協働による新商品開発プロジェクト

伝統産業の担い手である畳職人を外部講師として招き、複数回の授業を通じて「畳素材から生み出せる新たなプロダクト」をテーマにした探究活動を実施した。受講者（16～30名）は職人から畳の製法・素材特性・産業を取り巻く現状について直接学んだうえで、グループごとに新商品・新用途のアイデアを考察・立案し、最終回にプレゼンテーションを行った。本活動を通じ、学習者が伝統産業・文化への理解を深めるとともに、デザイン思考や創造的発想力、社会課題を解決する視点、そして他者に伝えるプレゼン・表現力を実践的に養うことを意図した。

## 3. 非言語によるメディア表現の実践としての学内写真展示

非言語によるメディア表現の実践として、学内の風景を被写体とした写真撮影を授業課題として実施した。学習者は日常的に目にしている学内空間をあらためて観察・撮影することで、構図や光・影といった視覚的表現を意識的に探求した。撮影した作品は学内にて展示し、言葉を介さずとも他者に何かを伝えるという非言語コミュニケーションの本質を、制作と鑑賞の両面から体験的に学ぶ機会とした。本活動を通じ、写真表現における構図・表現力の習得とともに、見慣れた日常空間を新たな視点で再発見する観察力を養うことを目指した。

## 4. Miro を活用した芸術鑑賞における感想の共有と考察

担当講義の一環として、国際芸術祭「あいち 2025」（旧愛知トリエンナーレ）の開催に合わせ、学習者とともに美術館を訪れ、実際の芸術作品を鑑賞する機会を設けた。

芸術作品に対する感想や解釈は、鑑賞者それぞれの主観に基づくものであり、唯一の正解を求める性質のものではない。この点は、最適解を追求する大学受験的な学習や初等自然科学の考え方とは本質的に異なる。しかし、こうした「正解のない問い」に向き合う姿勢を体系的に学ぶ機会、従来の教育課程においては十分に確保されにくいという課題がある。

そこで本実践では、鑑賞後に Web サービス「Miro」を活用し、各自が感じたことや気づきをオンラインホワイトボード上に自由に書き出す形で共有した。さらに、互いの意見を読み合い、他者の視点や解釈に対して考察を深める対話的な学習の場を設けた。これにより、主観的な感受性を言語化する力と、多様な解釈を尊重する姿勢の育成を図った。

## ○作成した教科書・教材

### 評価システムの開発

成績評価の透明性と公平性を高めることを目的に、独自の評価システムの改良を行った。出席状況・理解度・授業進行速度の体感・課題提出状況といった複数の指標を定量化し、また課題等の定性的評価と分離して管理することで、評価根拠を明確に示せる仕組みを構築した。

## ○自己評価

本年度の教育活動では、単なる知識伝達にとどまらず、企画、制作、展示、鑑賞、対話といった実践を通じて、学生が「考えたことを他者に伝わる形へと構築する力」を養うことを重視した。授業では、地域や伝統産業との連携、非言語表現としての写真展示、芸術鑑賞後の感想共有などを取り入れ、正解のない問いに向き合いながら、多様な視点を受け止め、自らの考えを表現する学習機会を設計した。

その結果、学生が自ら課題を見出し、他者と協働しながら発想を深め、企画・表現へとつなげていくプロセスを支援することができたと考える。一方で、こうした実践的・創造的学習の成果を、教育評価としてどのように可視化・蓄積するかは今後の課題であり、評価方法のさらなる整備を進めたい。

## II 研究活動

### ○研究課題

メディア表現研究（音響・映像・インタラクションなどの技術を活用し、メディア表現における新たな表現手法や技術の開発・研究を行う）

### ○目標・計画

メディア表現研究として、音響・映像・インタラクション技術を活用し、空間における新たな表現手法の開発と、その効果の検証を行う。具体的には、以下の観点から実装・実践を通じた技術的開発及び検証を進め、それらを統合したシステム、作品、プロダクトの制作を行う。

- A) 音響技術を活用した立体的音響空間の構築とその表現効果の検証
- B) 公共空間における音環境設計およびサウンドデザイン手法の開発
- C) 人の動きや行為に応答して変化する、インタラクティブな音響・映像表現技術の開発
- D) Computer Vision 等を用いた人の動態認識・人流解析に基づく空間演出の効果測定手法の開発

### ○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

#### （著書）

日栄一真（2020）「Maxで作る自分専用パッチ～Patch 40 カメラで心拍を検出してMIDIをトリガーするパッチ」『サウンド&レコーディング・マガジン』第39巻第9号, pp.200-201, 株式会社リットーミュージック, 2020年9月（依頼原稿）

日栄一真（2024）「空中で手を動かして音を奏でる Motion Harp と、MIC から入力した音をリアルタイムにMIDIに変換する Mic MIDI」『サウンド&レコーディング・マガジン』2024年3月号, pp.170-171, 株式会社リットーミュージック（依頼原稿）

日栄一真（2024）「セッションビューとM4Lに見る Ableton Live の特異性」『サウンド&レコ

ーディング・マガジン』2024年2月号, pp.182-185, 株式会社リットーミュージック (依頼原稿)

日栄一真 (2023) 「旧大黒屋の利活用」『まちなかワークショッププレイスの展開』, pp.4-8, 25-28, 一般社団法人津島まちやまちなみ再生機構, 2023年2月 (報告書掲載)

(学術論文)

(学会発表)

(特許)

(その他 作品・システム開発・社会実装)

日栄一真 (2019) 「聴診音録音装置」藤田保健衛生大学呼吸器内科, 2019年2月 (聴診器音響記録システム開発/聴診音の高音質録音およびスペクトラム解析アプリケーションの制作)

日栄一真 (2019) 「Electric Flower」Turku Art Museum (フィンランド・トゥルク市), 2019年9月 (インスタレーション作品)

日栄一真 (2019) 「水面に咲く電子植物」松重閘門 (愛知県名古屋市中川区), 2019年11月 (インスタレーション作品)

日栄一真 (2019) 「きらきらウォール」碧南市芸術文化ホール (愛知県碧南市), 2019年12月 (インタラクティブ作品/共同制作: 株式会社CS2)

日栄一真 (2021) 「THE SEQUENCE」ナディアパーク (愛知県名古屋市), 2021年12月 (インタラクティブ作品)

日栄一真 (2022) 「KARIYA MAPPING LIVE TOGETHER」刈谷ハイウェイオアシス (愛知県刈谷市), 2022年3月 (インタラクティブ映像・音響作品/人体検出を用いたリアルタイム生成型プロジェクションマッピングシステム開発)

日栄一真 (2023) 「INTERACTIVE FLOOR MAPPING」愛知県名古屋市, 2023年12月 (商業施設におけるインタラクティブ映像作品/インタラクティブシステム開発、映像制作: SOARZROCK)

日栄一真 (2024) 「秋音揚明輝」揚輝荘 (愛知県名古屋市), 2024年10月 (サウンドインスタレーション作品)

日栄一真（2024）「URBAN SOUND DESIGN PROJECT」 MIDLAND SQUARE スカイプロムナード（愛知県名古屋市），2024年11月（共同実践：Toru Yamanaka／サウンドデザイン）

日栄一真（2025）「URBAN SOUND DESIGN PROJECT」 ナディアパーク（愛知県名古屋市），2025年2月（共同実践：Sakura Tsuruta／サウンドデザイン）

日栄一真（2025）「URBAN SOUND DESIGN PROJECT」 COURTYARD BY MARRIOTT NAGOYA（愛知県名古屋市），2025年2月（共同実践：AOKI takamasa／DJによる空間サウンドデザイン）

日栄一真（2025）「JR ゲートタワー クリスマスツリー」名古屋駅（愛知県名古屋市），2025年11月（LEDイルミネーション、映像およびサウンドを統合制御するシステムの開発）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

ARToC10（中川運河アートプロジェクト助成），2018年度採択・交付，交付額50万円（外部・文化芸術助成）

ARToC10（中川運河アートプロジェクト助成），2019年度採択・交付，交付額100万円（外部・文化芸術助成）

ARToC10（中川運河アートプロジェクト助成），2020年度採択・2023年度交付，交付額150万円（外部・文化芸術助成）

クリエイティブ・リンク・ナゴヤ（文化芸術と他分野の連携による先駆的アートプロジェクト支援事業），2024年度採択・交付，交付額100万円（外部・文化芸術助成）

○所属学会

日本映像学会

○自己評価

研究活動においては、音響・映像・インタラクショナル技術を基盤としたメディア表現の実装を中心に、インタラクティブ作品の制作や空間演出、技術開発、専門誌での技術解説など、実践的かつ社会実装を伴う活動を継続的に行ってきた。特に、外部助成の複数年度にわたる採択により、文化芸術領域における研究実践の社会的有効性を一定程度示すことができている。

一方で、これらの成果を学術的知見として体系化し、論文や学会発表として発信する取り組みは十分とは言えず、研究としての形式化に課題がある。

今後は、実装・制作を通じて得られた知見を定量的・理論的に整理し、学術論文および学会発表へと展開することで、実践と研究の両立を図りたい。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### 【目標】

本学の教育の質向上および大学としての魅力向上に資する観点から、教育、広報、入試、学生支援、地域連携などの各領域の関係性を意識しながら、大学運営に適切に関与することを目標とする。

また、学生にとってより良い学修環境や大学体験の形成が、結果として大学全体の価値向上や対外的な魅力発信にもつながるという視点を持ち、大学運営に貢献することを目指す。

##### 【計画】

委員会活動や学内業務においては、個別の業務課題を単独で捉えるのではなく、教育、広報、入試、学生支援、地域連携等との関係性を意識しながら、必要に応じて横断的な視点から課題整理や改善に関与する。

特に、広報活動においては本学の教育内容や特色が適切に伝わるあり方について意識し、入試においては生成 AI 時代に対応した評価方法や課題設計について検討に参加する。

また、地域・産学連携センター運営委員会においては、地域社会や外部機関との連携を通じて、教育・研究活動を社会へ接続する機会や実践的な学びの場のあり方について意識しながら関わる。

#### ○学内委員等

広報委員会

入試委員会

地域・産学連携センター運営委員会

#### ○自己評価

本年度は、広報委員および入試委員としての活動を通じて、大学運営における課題が個別の部署や委員会の中だけで完結するものではなく、教育、広報、入試、学生支援など複数の領域にまたがって存在していることを認識する機会となった。特に、少子化の進行や生成 AI の普及といった社会環境の変化により、大学がどのような教育を提供し、どのような学生を受け入れ、その価値をどのように社会へ伝えるかという点が重要であると感じた。

また、広報活動を通じて、本学の魅力発信は単なる情報発信にとどまらず、教育内容や学生体験とも密接に関係していることを実感した。さらに、入試業務を通じて、生成 AI 時代における評価方法や課題設計の見直しの必要性について考える機会となった。

加えて、地域・産学連携センター運営委員会に関わる中で、大学の教育・研究活動は学内で完結するものではなく、地域社会や外部機関との接続の中でその価値がより具体化されることを改めて認識した。特に、地域連携や産学連携は、大学の社会的役割を示すだけでなく、学生にとっても実践的な学びの機会を生み出す重要な基盤であると感じた。

これらの経験を通じて、大学運営においては各委員会が個別に対応するだけでなく、相互に連携しながら課題を共有していくことの重要性を認識した。今後も、教育実践の立場から大学運営に関わりながら、必要に応じて改善に貢献していきたい。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### 【目標】

音響・映像・インタラクション技術を活用したメディア表現の知見を、地域社会・公共空間・商業空間・地域メディアへと接続し、文化芸術を通じた新たな価値創出に寄与することを目標とする。また、行政・民間事業者・地域団体・メディア等との連携を通じて、専門的知見を社会へ還元するとともに、研究・教育・実践を横断する社会実装型の活動を展開する。

###### 【計画】

公共空間や商業空間におけるサウンドデザイン、地域メディアを通じた文化発信、ならびに都市・地域に関わる社会実証実験や連携事業への参画を通じて、専門性を活かした社会貢献活動を継続的に行う。また、こうした活動を単発的な実践にとどめず、研究的検証や教育活動とも接続しながら、地域社会に還元可能な知見の蓄積と発信を図る。

##### ○学会活動等

該当なし。

##### ○地域連携・社会貢献等

###### 金山南駅「人・文化・芸術チャレンジ」社会実証実験（2025年11月21日実施）

連携先：名古屋市住宅都市局まちづくり企画部、一般社団法人 Park Line 推進協議会（大成建設株式会社）、愛知東邦大学 日栄研究室

名古屋市が推進する都市開発に向けた社会実証実験の一環として、公共空間におけるサウンドデザインおよび人流解析の可能性を検証するプロジェクトを実施した。本取り組みでは、「DJによる公共空間でのサウンドデザインの可能性」を中心に、音響・インタラクション技術を活用した空間演出の実践を行うとともに、その効果を定性的・定量的に評価した。

具体的には、公共空間に適した音楽選定および音響設計を通じて、来場者の滞留や空間の雰囲気形成に与える影響を検証した。その結果、DJという表現手法が従来のクラブカルチャー的文脈にとどまらず、公共空間における自然なサウンドデザイン手法として有効に機能し得ることが確認された。

また、Computer Vision ライブラリ「YOLOv8」を用いた人流解析システムを独自に構築し、IPカメラとPythonによる無線映像取得を組み合わせることで、公共空間における人の流れや滞留状況の計測・分析を試みた。検証の結果、人体検出および人数把握は概ね良好に機能し、空間演出の効果測定手法として一定の有効性を確認した。

本実証実験は、行政・民間事業者・大学の三者連携により、研究・教育・社会実装を接続する取り組みとして位置づけられるものであり、今後の公共空間活用や都市開発、地域文化施策に対

して還元可能な知見を得ることができた。

### **COURTYARD BY MARRIOTT HOTEL でのサウンドデザイン（2025年度 毎週金曜・継続）**

ホテル内ラウンジ空間において、DJによる継続的なサウンドデザインを実施した。空間の用途や時間帯、利用者の滞在状況に応じて、楽曲のジャンル、テンポ、質感、音量バランスを調整し、来訪者が快適に過ごせる音環境の形成を試みた。本実践は、DJを単なる娯楽的演出ではなく、商業・ホスピタリティ空間における音環境設計の手法として応用するものであり、空間体験の質の向上や滞在価値の形成に対する音の役割を継続的に検証する取り組みである。

### **ラジオにおける地域文化・芸術発信活動（2025年度・継続）**

地域コミュニティ FM である HEART FM の番組『DJ BEAT』において、音楽・芸術・地域文化に関する継続的な情報発信および番組企画・出演を行った。番組では、地域で活動するアーティストやクリエイターをゲストとして招き、音楽・表現・文化活動について広く発信した。本活動は、地域メディアを通じて文化芸術へのアクセス機会を創出し、地域社会と表現活動を接続する社会貢献活動として位置づけられる。

### **津島神社での雅楽奉奏活動**

津島神社の伶人として、祭礼や神事における雅楽奉奏を継続的に行っている。こうした活動を通じて、地域に根ざした伝統文化の継承に関わるとともに、音楽が空間や人の意識に与える影響について、儀礼的環境の中で実践的に理解を深めている。加えて、連続的・身体的・文脈的に伝承されるアナログ的な音楽のあり方と、記号化・構造化・離散化を前提とするデジタル的な表現体系とを比較しながら、それぞれの特性や知覚、継承の構造について理解を深めている。

### **○自己評価**

本年度の社会貢献活動においては、公共空間、商業空間、地域メディアといった複数の場において、音響・メディア表現に関する専門性を活かした実践を継続的に行うことができた。特に、金山南駅における社会実証実験では、行政・民間・大学の三者連携を通じて、サウンドデザインや人流解析を含む実装・検証を行い、研究・教育・社会実装を接続する取り組みを具体的に展開できた点は大きな成果である。

また、商業空間における継続的なサウンドデザイン実践や、地域コミュニティ FM を通じた文化芸術発信活動を通して、音や表現を地域社会へ還元する機会を継続的に持つことができた。これにより、自らの専門領域を地域社会や公共性のある場に接続する活動を一定程度実現できたと考える。

一方で、これらの活動は実践としては展開できているものの、その社会的効果や地域への影響をどのように整理・可視化し、継続的な連携や制度的な枠組みへと発展させていくかについては今後の課題である。今後は、社会貢献活動を単なる実践にとどめず、研究的知見や教育成果と結びつけながら、より継続性・発展性のある地域連携へとつなげていきたい。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自作の音響用プログラムを、海外のユーザーコミュニティや共有プラットフォームを通じて公開・共有し、技術的知見および表現手法の発信を継続している。こうした活動を通じて、国外を含む実践的コミュニティとの接点を持ちながら、自身の技術・表現の両面における継続的な改善と検証を行っている。加えて、近年はAIを活用したコーディング支援や制作ワークフローの活用方法についても学習を進め、AIを用いたプログラム開発や表現制作における新たな実装手法の検討を行っている。一方で、こうした技術的アプローチと、雅楽や伝統音楽に見られる身体性や文脈に基づく音楽表現とを、自身の中で対比的に捉えながら往還し、それぞれの特性を横断的に理解することで、メディア表現の新たな手法および実装方法の可能性について探究している。

#### VI 総括

これらの活動を総合的に振り返ると、自身の研究活動、社会実装としての実務、そして地域・公共空間における社会貢献的实践が、それぞれ独立したものではなく、相互に連動しながら展開されていることが明確になった。

研究において検討している音響・映像・インタラクション表現の可能性は、実際の社会空間や実務の現場において実装・検証され、その成果や課題は再び研究へと還元されている。また、そうした実践の蓄積は、地域社会や公共空間への貢献としても接続されている。

さらに、こうした自身の実践のフィールドを教育の場へと接続することで、コミュニケーションデザイン学科における学びが、単なる知識習得ではなく、社会との具体的な接点を持つ実践的な学びとして展開し得る可能性が見えてきた。一方で、こうした教育実践が学生の成長にどのように寄与するかについては、今後の継続的な検証が必要である。

今後も、研究・実践・教育・社会貢献を分断するのではなく、それらを相互に循環させながら、コミュニケーションデザイン学科における学びの社会的接続のあり方について、引き続き実践と検証を重ねていきたい。

以上